

2020年度 第5回 ライフステージ事例検討会 報告書	
日時	2020年11月10日(火) 17時45分～19時00分
開催施設 参加者数	金沢大学3名、富山大学6名、福井大学2名、石川県立看護大学7名、信州大学6名、 金沢市立病院2名、金沢赤十字病院0名、石川県立中央病院5名、浅ノ川総合病院0名、 公立松任石川中央病院0名、公立能登総合病院0名、石川県済生会金沢病院0名、 富山県立中央病院4名、金沢医科大学氷見市民病院0名、 富山労災病院0名、黒部市民病院6名、富山市民病院3名、富山赤十字病院0名、 長野赤十字病院4名、諏訪赤十字病院0名、福井県立病院5名 会場参加 計53名 その他 個別のオンライン参加 計67名  合計120名
テーマ	「予後不良な思春期の子どもに病状を伝えることを望まない家族との関わり」
発表者	富山大学附属病院 樋口 麻衣子さん
【意見交換内容】	<p>1. 父親が休息した要因、疾患等があったのかという質問に関して、「ショックで仕事を休んでコロナ影響でそのまま休職へ入った。鬱っぽい感じがあり、適応障害はあったのかもしれない、診断はついていない」という回答があった。</p> <p>2. Aくんの手術経過(身体的症状)やキイトルーダの治療中の会話はどのようなものだったかという質問に、「特に身体症状はなかった。その後はてんかんで入院した。病棟で治療中に辛いことや気になることはないか聞いたが、「ない」とのことで、困っていることに関しては「学校にはいけないこと」といった返答があった。</p> <p>3. メラノーマの病変を取り除くまでの本人の思い、脳の手術に対する本人の思いに関しての質問に、「術後の状況は分からない、「できものができているから」という返答であり母斑の治療の延長に捉えている」といった返答であった。</p> <p>4. 父親のご家庭での状況はという質問には、「母親は病気のことを考えたくない、病気のことは触れずに生活していたのではないと思う。」といった回答があった。</p> <p>5. 母親に対するケアはどのようなことをしていたかという質問に、「本人にはCLSがフォロー、母親へは緩和ケアチームが対応していた。」という回答があった。</p> <p>6. 成人でもよくある両親が症状を伝えないというプロセスはどうであったかという質問に、「母親は病状を受け入れられない混乱から、親からみる子供への視線、父母間の関係性などもあって揺れる気持ちから、窮屈な思いをしていたと考えられる」と回答があった。</p> <p>7. 今回の事例は結局家族に焦点がいつている。親に対しての「告知」という面で長い関わりの中聞けるタイミングはなかったのかという質問に、「両親からは「言ってくれるな」という姿勢が強く感じ取られ、子供自身も周りの大人の状況を伺っている姿勢があった。そのため主治医も少し避けている印象があった。さらに患者本人から直接聞いてくることはなく「病状を知りたい」表示は感じられていなかった。」と回答があった。</p> <p>8. 訪問看護師より自宅退院後の経過について以下のように話された。病状が進行し脳外科医より「食べられないから点滴して」と訪問看護に依頼があった。しかし、家族、本人は自宅へ医療者が介入することを拒んでおり、点滴はせずという方向で何も持たずに自宅訪問という形で訪問看護を導入した。両親からは「息子と相談してみる、家で点滴など痛いことはしたくない、薬で何とかできないか？」という要望があった。自宅での家族関係の状況は、本人の側に父親が付きっきりの状態。トイレに行くにしろ父親が見守っているような状況であり、母親が耐えられなくなっているような状況であった。本人からは自分の足で学校に通いたい、学校に行くなら途中で帰ったりせず、普通に過ごしたいという気持ちがあった。</p> <p>9. 両親二人がクローズドの世界、家族3人の関係性がとてもつらい状況。子供自身がわかっても親のためを思って黙っていたのかもしれないという意見があった。</p>
ミニレクチャー	「子どもが自分自身のがんについて知ることについて」